

〔雪舟特別展によせて〕

雪舟の「摘星樓図」—古典主義をこえて—

(掛幅 紙本墨画淡彩 80.4×32.8cm)

この秋、当館の特別展「雪舟」において、久しぶりに雪舟の山水画「摘星樓図」(個人蔵、図1)が出陳されます。その公開は、昭和31年(1956)の京都国立博物館の「雪舟」展以来のことです。

この「摘星樓図」の名称は、この画に着賛された龍岡真圭の七言絶句の詩句からつけられたものです。名づけ親は、米国・メトロポリタン美術館の大西廣氏で、昭和51年1月から『日本美術工芸』誌(448~475号)に連載された「雪舟史料を読む」(全24回)に出ています。大西氏は、この画について、室町時代の禅林で大流行した詩画軸のうちの「書斎図」の一つではないかといっています。

この画の右下隅に、「雪舟筆」の落款があり、白文方印「等楊」の印章が捺されています。島田修二郎氏は、この落款、印章に疑問をいだきながらも、図上に、かつて「雪舟二字説」(龍岡真圭が相国寺の鹿苑僧録司在任中の寛正3年(1463)に等楊の求めに応じてつくった字説。雪舟43歳のとき)を与えたことのある龍岡真圭の詩があることから、雪舟が入明する前ごろ(応仁元年(1467)以前)、周防の山口へ赴いた時期の作品であるとされました(島田修二郎「雪舟」『日本美術の巨匠たち』筑摩書房、昭和57年)。また、島田氏は、この画について、「伝周文山水と全く同一傾向の作風をもち、筆法墨法も甚だ近く、雪舟画風の源泉を暗示する」(京博「雪舟」展図録)と指摘されました。

中央にそびえる峨々たる山が主山で、この山水画の構図をきめています。この構図は、雪舟の師である周文の筆に擬せられる「水色巒光図」と同じで、室町水墨山水図の古典的な構図法に拠っているといえます。

遠景は、主山の両脇に淡い藍色

の遠山が低く描かれていますが、雲に閉ざされているのか、主山とのつながりはうすい。そのかわり前景の水際からがっちりした岩山が立ち、その脇を曲った一筋の小径が、奥へ進み、中景の松林に囲まれた樓閣のある山へ上り、そしてそびえ立つ主山へとつながっているようです。この構図法は、「高遠法」を基本としながらも「深遠法」をとり入れる複合的なやり方であるといえます。ここには、男性的な力強さがあり、同時に奥へ奥へと引き込む隠れ里的な女性的な安息のやさしさがあります。

水辺の小舟の中では漁夫と樵夫とが語らい、岩山の陰にはかれらの住まいの茅屋が望まれる。俗塵を避け自然と同化して生きる人々を表します。一方、山上の松林に囲まれた樓閣(書斎)は、隠棲者の住まいでしょう。梁の隠士で松籟を愛した陶弘景が住む三層楼をイメージしたものでありましょう。

龍岡真圭の詩は次の通りです。海山撃出摘星樓、聞説杯看馬九州。一路縁雲蛇倒退、凌秋欲到最高頭。(海山撃出ス、摘星樓、聞クナラク(聞くところでは)、杯ニ馬ノ九州ヲ看ルト。一路雲ニ縁リ、蛇倒ニ退ク、秋ヲ凌ギテ、最高頭ニ到ラント欲ス。)

「摘星樓」とは、星を指差す樓閣のこと、また星をつまみとることができるとの「最高の処にある樓閣」という意味をもつと考えられます。諸橋の『大漢和辞典』によると、「摘星樓」について「江蘇省江都県城の西北隅。賈似道が寶祐城を築き、樓を其の上に建つ」と出ていますが、もちろんそれを写したものではありません。「摘星樓」という書斎が誰のものであったかはわかりませんが、ここでは、龍岡真圭は、雪舟の画の世界から自らの詩の世界へ展開しているの

です。「海山撃出ス」の詩句から、かれが中国の東海にあるという不老の仙人の住む浮き島「蓬萊山」(図2)を想像したにちがいありません。その海は、酒の杯の中であり、また「馬の九州」つまり「中国全土」をも含むという伝説があったらしい。これは、「一粒粟中蔵世界、半升鑑内煮山川」(『人天寶鑑』呂洞賓)と同じような中国風のおおげさな表現で、いわゆる「入れ子」構造の世界を示しています。蛇のように曲りくねった「一」路は、『三体詩』にある韓翃の詩「送齊山人」の「一路寒山万木中」のように、隠棲者の住む処へわれわれを誘います。「凌秋」からは、清々しく澄みきった、どこかもの寂しい秋の空を連想しますが、また「涼秋」を重ねた表現と解され、その季節は陰曆の九月でありましょう(「涼秋」は九月の異称)。としますと、「欲到最高頭」とは、古来、九月九日の「重陽」の節句に高山に登り(「登高」という)、杯に菊花をひたした「菊酒」を飲み、災厄を消したという故事からきているのではないだろうか。龍岡真圭(の心)は、誰かといっしょに、雪舟の画の山径をゆつくり登り、主山に向います。その山の頂上では、はるかに中国大陸が眺望されたにちがいありません。

「摘星樓図」という作品は、雪舟が「摘星樓」の主人の書斎のために描いたものにちがいありませんが、賛者の龍岡真圭は、この「書斎図」をかりて、雪舟が中国へ渡りに際しての「送別のなむけ」の気持を表そうとしたのではないでしょう。

この画は、周文が完成した典雅な古典様式を追い求めながら、すでに前景の岩や樹木の強い墨法には、雪舟の個性が顕れています。(林進)



図1 摘星樓図 雪舟筆 龍岡真圭賛

図2 蓬萊図『三才図会』より



季刊 美のたより No.108

平成6年8月18日

発行 大和文華館